

兵藤裕己

著

王権と物語

漂泊芸能民による語りが王権と寺社に吸い上げられ△歴史▽テキストとして成書されていく過程に中世の重大な位相的転位があった。中世王権の構造を解説する気鋭の論考。



王権と物語

一九八九年九月二十日 第一版第一刷発行

兵藤裕己（ひょうどう・ひろみ）

一九五〇年、名古屋生れ。

京都大学文学部、東京大学大学院修士課程修了。

国文学専攻。

埼玉大学助教授。

著書に『語り物序説』（有精堂）

『物語・差別・天皇制』（共著 五月社）

著者 兵藤裕己

発行者 矢野恵二

発行所 青弓社

東京都千代田区飯田橋一―六―三 幸洋ビル

電話〇三―二六五―八五四八（代）

振替〓東京八―八九四五七

印刷所 文昇堂

製本所 大口製本

© Hiromi Hyodo

0039—890216—4065

兵藤裕己

王権と物語

漂泊主権民による語りが王権と寺社に吸い上げられ、歴史として成書されていく過程に中世の重大な位相的転位があった。中世王権の構造を解読する試みの論考。



青弓社

王權と物語／目次

第Ⅰ章

物語——触穢と浄化の回路

7

ホカヒビトの芸能／「琵琶法師の物語」／ホカヒと鎮魂(1)／ホカヒと鎮魂(2)／触穢と浄化、あるいは罪と流離／浄化の語り——物語から私小説へ／物語の〈定型〉と差別

第Ⅱ章

物語りの巫俗

37

軍記と物語り／文字の語り／盲人の語り／憑依体験の語り／
霊語りの発生／憑祈禱の巫俗／「平家」語りの成長／文字テ
キストの成立／モノ語りの「正史」化／「正史」のモノ語り
化

第Ⅲ章

王権の時空と反世界——平家物語論

65

王権共同体／因果論と無常観／王権因果論／王法と仏法／終
末意識／因果論の相対化／天魔・物怪・怨霊／モノガタリの
発生／〈歴史〉とモノガタリ

第Ⅳ章 太平記——情況と言葉

100

歴史伝承の系譜／言葉の構造／情況と〈群〉／行動の個人化
／情況あるいは意味の喪失／言葉と情況／“日本”的アジテ
ーションの始発

第Ⅴ章 仏と神——教化のイデオロギー

143

信仰と支配／二つの教化／教化活動と寺院／聖德太子と仏教
／僧綱と国師／神言伝達者の思想／高座説経(1)／高座説経(2)
／文字と語り／仏主神従の論理

第Ⅵ章 和歌と天皇——“日本”的共同性の回路

175

歌ヨミと歌ツクリ／ヨムことの共同性／和歌表現の様式／詩
的イデオロギーの構造

あとがき

205

装丁——工藤強勝
装画——坂爪厚生
「白のフォークロア」より

第I章 物語——触穢と浄化の回路

物は霊であること、存在は物^{モノ}に^モ霊であることで存在たりえたのが、私たちの古代的世界である。鳥獣はもちろん、草や木、岩、野山、河海などもそれぞれの霊魂をもち、言語を発している。

草木^{くさき}咸^{ことごとく}に能^よく言語^{ものいふこと}有り……（神代紀・下）

草木^{くさき}言^{ものかたり}語^{とき}せし時……（欽明紀十六年二月）

石根^{いはね}・木立^{こだち}・青水^{あをみな}沫^{こと}も事問^{ことと}ひて荒^{あら}ぶる国……（出雲国造神賀詞）

語問^{ことと}ひし磐根^{いはね}・樹立^{こだち}・草之^{くさの}片葉^{かきは}……（六月晦大祓・崇神遷却・大殿祭の祝詞）

人間生活をとりにくくそれら自然界の精霊^{セイレイ}にたいして、時をさだめておとずれる遠来の霊物——まれなる来訪者という意味で、折口信夫はマレビトと名づけた——がある。マレビトの原郷は、沖繩でニライカナイ、ヤマト古代では常世^{トコヨ}（記紀神話のレベルで高天原）ともよばれ、それは、太陽が生成

し、あらゆる生命力・生産力の源泉としてある異郷である。マレビトは常世の威力をもって祭りの庭にのぞみ、土着の精霊を圧伏して、人間生活を豊かにすることを誓わせる。精霊はしばしばシジマをもって抵抗するが、ついには誓詞(ヨボト「誓詞」)をささげて服従を誓わねばならない。精霊の反抗から敗北・服従にいたる過程はモドキとよばれ、とくに精霊の代表格の行うモドキによって、マレビトの呪的行為の効果が確認されると考えられていた。

さきの「草木(こくそく)威(い)に能く言語(ごんご)」「石根(いはね)・木立(こだち)・青水沫(あをみなは)も事問ひて荒ぶる国(くに)」の常套句は、高天原から天つ神(天孫)が来訪する以前の葦原中国、すなわち、古代ヤマト王権が確立される以前の日本国土の神話的表象である。それは、岩根(いはね)・樹立(こだち)・青水沫(あをみなは)・草之片葉(くさのかきは)など、あらゆる精霊のざわめく神話的無秩序として表象されるが、とくに欽明紀の「草木言語之時」について、『（新）日本紀』(卜部兼方編、十三世紀末)は、「クサキモノガタリセシトキ」の古訓を付している。来訪する霊物(かみ)の呪言にたいして、鎮められる土着の霊物(たま)の「言語」——『日本書紀』の文脈に即していえば、天孫の降臨とともに沈黙する国つ神の「言語」が「モノガタリ」とされるわけで、ここに物語の最初の定義はあたえられる。

神の呪言にたいして、それに敗北・屈従を予定されたモノガタリが存在する。未明の村落社会における(原型としての)来訪神と地霊のかけあい神事に由来し、そのくりかえしのなかで定型化されるモドキ態(カタ)としてのモノガタリは、しかしどのようなようにして「日本」的な物語を形成するのか。私たちはまず、文献のむこうに透かしみえる古代の漂泊民の物語から考えてゆく必要がある。かれらの流離・漂泊が、ヤマト王権の拡大にともなうムラの解体と不可分の問題である以上、漂泊民のもち

つたえた神の語りは、そのままモノ語りの位相の問題でもあるだろう。もちろん漂泊芸能民のモノガタリについて考えることは、平安貴族社会の物語をむしろすどおりして、中世の物語・語り物から考えることでもあるだろう。

一 ホカヒビトの芸能

藤原明衡の『新猿楽記』（十一世紀半ば頃成立）は、平安中期の芸能民についてのべて、その芸目・芸態を列举している。

予、廿余季よりこのかた、東西の二京を歴観るに、今夜の猿楽見物ばかりの見事なるは、古今において未だ有らず。なかんづく、咒師、侏儒舞、田楽、傀儡子、唐術、品玉、輪鼓、八玉、独相撲、独双六、無骨有骨、延動大領の腰支、蝦蟇舎人の足仕、氷上の専当の取袴、山背の大御の指扇、琵琶法師の物語、千秋万歳の酒禱、飽腹鼓の胸骨、蟾蜍舞の頸筋、福広聖の袈裟求め、妙高尼の纏線乞ひ、形勾当の面現、早職事の皮笛、目舞の翁躰、巫遊の気装貌、京童の虚左礼、東人の初京上り、況んや拍子男共の気色事敢、大徳の形勢、すべて猿楽の態、嗚呼の詞、腹を断ち、頤を解かずといふこと莫きなり。（原漢文）

唐術・品玉・輪鼓・八玉などの曲芸奇術ふうの従来の散楽にくわえて、咒師・侏儒舞・田楽・傀

傀儡は散楽以前に伝承系統をもち、また大領と舎人、専当と大御、聖と尼、勾当と職事、京童と東人、男と大徳といった組みあわせで（どれも二者一対である点に注意したい）、寸劇ふうの滑稽な物まね芸が行われている。当代の芸能、いわゆる「新猿楽」が、いかに多様な芸目・芸態で行われていたかがうかがえるが、そのひとつとして、「琵琶法師の物語」が語られていた。

傍点を付した「琵琶法師の物語、千秋万歳せんずの酒禱さかほがひ」の対句は、前後の文脈からみて内容的にも対をなしたとおもわれる。まず「千秋万歳」について、林屋辰三郎は、それが前代のホカヒビトの系譜をひいており、ホカヒビトの「賀詞としての千秋万歳が、そのままかれらの通称となったもの」とのべている。⁽⁴⁾ホカヒとは、ホキ（ホク）の延言・再活用であり、賀詞をとなえて祝う行為、「千秋万歳」の語が、ほんらい祝言いわげの常套句である以上、それは特定の芸目・芸態を意味するというより、寿祝芸能民——前代の語でいえばホカヒビト——の通称と考えるのが自然である。そして千秋万歳の祝言の副演出キョダツとして演じられたのが、酒禱さかほがひすなわち宴席で舞われる祝言の歌舞であつたろう。たとえば、鎌倉時代の辞書『名語記』によれば、

千秋万歳トテ、コノゴロ正月ニハ散所ノ乞食法師が、仙人ノ装束ヲマナビテ、小松ヲ手ニサムゲテ推参シテ、様々ノ祝言ヲイヒツゞケテ、録物（録）ニアヅカル……

とあって、中世の千秋万歳は、散所法師（唱門師とも呼ばれる下級の陰陽師）のもち芸とされていた。⁽⁵⁾「仙人ノ装束ヲマナビテ」とは、田楽や能楽の翁にもかよう来訪神マレビトの陰陽道的表現であり、散所民

が翁Ⅱマレビトに扮して正月の祝言に歩いていたことがしられる。おなじ散所民のもち芸とされた中世の舞々（幸若舞）は、千秋万歳のモドキとして成長したわけで、その関係はおそらく、上代のホカヒビトにおける祝言と歌舞の関係にもかようだろう。

『万葉集』巻十六には、「乞食者之詠」^{ホカヒビトノウタ}と題した二首の長歌がみえる。まず、三三八五番歌は、平群山で捕えられた牡鹿がみずからの角・毛皮・肉などを天皇に献じて服従を誓う内容、つづく三三八六番歌は、難波江の葦蟹が塩づけにされ、天皇の食膳に供されるまでをうたって「歌びと」「笛吹き」「琴弾き」であれ天皇のいかなる仰せごともうけようという、やはり服従を誓う内容である。左注に、それぞれ、

右の歌一首は、鹿の為に痛を述べて作れり（三三八五番）

右の歌一首は、蟹の為に痛を述べて作れり（三三八六番）

とあるが、ここではホカヒビトの祝言が、鹿や蟹に託された服従の誓いとして歌われたことに注意したい。この二首の歌のまえには、とうぜん土地の精霊に服従をせまる呪言がとえられたとおもわれ、呪言の副演出^{モドキ}として、精霊（鹿や蟹はその代表格）の側からする服従の寿歌・祝歌も歌われたものだろう。

ホカヒビトの歌は、三三八六番の歌詞にみえる「笛」「琴」などを伴奏楽器にもちいたとおもわれ、それには鹿や蟹が服従するさまを模した滑稽な所作・物まねが付随しただろう。このホカヒビトの

物まね芸から、モドキ芸の分化・発展としての芸能史の問題を見とおしたのは、いうまでもなく折口信夫である。

万葉卷十六の「乞食者之詠」^{ホカヒビトノウタ}とある二首の長歌は、ほかひびとの祝言^{シラゲン}が、早く演劇化した証拠の、貴重な例と見られる。……

此歌は、鹿・蟹の述懐歌らしいものになつて居るが、元は農業の、害物駆除の咒言^{ジュゴン}から出て居る。即、田畠を荒す精霊の代表として、鹿や蟹に、服従を誓わす形の咒言があり、鹿や蟹に扮した者の誓ふ、身ぶりや、覆奏詞^{カヘリマツシ}があつた。此副演出の部分が発達して、次第に、滑稽な詠、をこな身ぶりに、人を絶倒させるような演芸が、成立するまでに、変つたのだと思ふ。

（偶人信仰の民俗化並びに伝説化せる道」全集三卷）

農作を阻害する土地の精霊^{セイレイ}にたいして、それに服従を誓^カわせる神の呪言^{カミ}がまず発せられる。つぎに、その呪言の効果をより強力にするため、土地の精霊が服従を誓い、呪言の内容を復誦^{カヘリマツシ}（覆奏詞）・物まねする副演出^{ホドウト}がおこなわれる。その副演出が分化・発展した初期のかたちとして、「乞食者之詠」^{ホカヒビトノウタ}が位置づけられるわけだ。つまりホカヒビトの詠をあいだにおくことで、原型としての来訪神^{マレビト}と土地の精霊のかけあい神事から、日本の芸能・演劇が成長した基本的な筋道が見とおされるのである。たとえば、

日本古代の神事演芸は、神と精霊との対立に、其単位があつた。して対^レわ^レきは、其から出来たのであるが、能楽の本領は、其わ^レき方にある。……

翁に対する神能の關係は、副演出と見なければならぬ。翁の芸を三番叟が翻訳し、更に神能が説明することになるのであるが、尚此上に、次の番組で神能の説明が試みられる。……

翁が毎日繰り返された意味は、これで決る。どの能もが、翁の説明であり、副演出であるからである。猿楽の基礎は、翁であるが、此「翁」は、もとは田楽附属の芸であつた。それが幾つもの副演出を重ねて行くことによつて、遂に猿楽を分離せねばならぬほどにまで、発達したのである。猿楽は其最著しい例であるが、かうして副演出を重ねて行つたのは、單に猿楽ばかりではない。

……かくて、能の源流は脇能にあると言ふことは、日本の演劇史を研究する上に、極めて大切な問題となるのである。

〔能楽における「わき」の本義〕全集三卷

能のばあい、演能のはじめに演じられる翁（式三番という）には、シテ方の勤める翁（白式尉）と、狂言方が舞う三番叟（黒式尉）とがある。前者は、長寿と天下泰平を祝禱し、後者は、五穀豊穡を祈願するが、折口によれば、兩者の關係はほんらい、マレビトとその副演出^{キドナ}の關係にあつたという。そして翁と三番叟の式三番につづけて、初番の神能が「脇能」と称されたのは、それが式三番にたいするワキであるからで、さらに脇能につづく二番の修羅物、三番の鬘物、四番の雑物、五番の切能物にしても、それぞれがそれ以前のワキ芸^{キドナ}副演出^{キドナ}として発生したという。

独立したワキ芸としての能は、その内部にシテ方と狂言方を分化し、シテ方の能は、一曲のなか

にシテとワキの対立を生みだすことになる。また狂言方にしても内部にシテとアドの対立単位をもつ。それは、中世の散所民が「仙人ノ装束(翁)ヲマネビテ」おこなう千秋万歳から、ワキ芸としての舞々(幸若舞)が分化し、さらに舞々が「二人舞」と称されたように、『管見記』『実隆公記』など、太夫とワキの二人語りの形式をとったことにも共通する。原型としての来訪神と土地の精霊——カミとモノ——のかけあい形式、その二者一対の関係が、日本芸能の定型として持続していたわけで、それはおそらく、ホカヒビトの語る「物語」についても例外ではなかったろう。

二 「琵琶法師の物語」

『新猿楽記』では、「琵琶法師の物語」が「千秋万歳の酒禱」と対になっている。千秋万歳は、中世には「散所の乞食法師」(『名語記』)のもち芸とされるが、おそらく法師形の「乞食者」という点で、琵琶法師・千秋万歳は内容的にも対をなしたとおもわれる。

琵琶法師が、年頭の祝言に家々をまわったことは、中世の日記・記録類からうかがえる。たとえば、『経覚私要抄』文明二〜四年(一四七〇〜二)の正月には、琵琶法師が大乗院門跡経覚のもとに参賀におとずれている。とくに文明三年正月十四日の小正月の条には、

巳ノ下刻、盲目参賀十五人、……稲花ヲ申ス器用ノ者コレ在リ。平家一句語ル可キ由ヲ仰ス間、一句ヲ語ル。其ノ後、暇ヲ給ヒ了ンス。能有ル者申ス可キ由ヲ仰ス間、早物語ヲ申ス。一興ナリ。

とあり、文明四年正月十日の条、つまり事始めの前日には、

座頭十八人來タル。稲花ヲ語リテ後、平家并ビニ早物語ヲ為ス。

とある。平家と早物語のまゑに、それぞれ「稲花」が語られるが、現在でも、稲の豊饒を擬して、藁や木の枝に餅をつけた小正月の飾り物が稲花・餅花などとよばれている。座頭が語った「稲花」にしても、おそらく正月の祝言・賀詞のたぐいとおもわれるが、つづく「平家一句」も、おそらく「鱸」などの祝言的な章段をかたったものだろう。

稲花・平家一句につづく「早物語」は、祝言的な内容の早口の物語である。とくに軍記物のもじり・パロディがおおいが、近世にも、座頭が正月の祝言として早物語を語った例がある（『秋田風俗問答』）。早物語はおもに弟子の座頭・子盲によって語られたらしいが、とすれば、「稲花」のモドキとして、まず師匠格のかたる平家があり、さらにそのワキ芸としての早物語という関係があったろう。祝言とモドキ、シテ方とワキ方というホカヒビトの二者一对の関係が、琵琶法師の芸態にも共通しているわけで、それはおそらく、中世の絵巻・屏風絵類にえがかれた琵琶法師が、いずれも二人一組で遊行していることも無関係ではない。

「琵琶法師の物語」は、ほんらい祝言ホカヒのモドキ芸として発生したわけだ。モドキとしての物語が、いつか琵琶法師の本芸とされたことは、幸若舞や能のばあいとおなじである。そして能がシテとワキの二者一对で演じられ、幸若舞が太夫とワキのかけあいあひで語られたのと同様（さらに狂言のシテと